

保育施設における子育て支援を意識した 音楽コンサートの実践と一考察 ——プログラム構成の変遷と実践者の意識の変化から——

A Study on the Practice of Music Concerts Considering Child-Rearing Support in Child-Care Facilities: Changes in Program Structure and Practitioners' Awareness

武田 克江・清水 桂子

Katsue Takeda, Katsurako Shimizu

はじめに

近年の子育て支援は、2015(平成27)年に子ども・子育て関連3法による子ども子育て支援新制度の施行にもとづき進められる。保育施設においては、保護者や家庭との連携による子どもの育ちを支えることがより求められてきた。こうした背景のもと保育所保育指針は、前指針である2008(平成20)年の改定時において「保護者支援」として入所する子どもの保護者に対する支援が加えられたが、2017(平成29)年の改定で、「保護者に対する支援」の章は「子育て支援」に改められた。これまで以上に、保護者や家庭と連携した中で、質の高い子育てに向けた内容が示されたものとなったのである。こうした変遷の中で、筆者らは保育施設における音楽コンサートの実践を継続してきた。その実施においては、音楽療法的視点をもち子育て支援の一助とした実施内容に向けるものとし、構築と検討を繰り返してきたものであった。中でも特にプログラム構成に反映することに意識を向けてきた。

子育て支援における音楽コンサートは、多くの実践が展開され研究も進められている。山原ら(2020)¹⁾は、子育て支援としての音楽コンサートの実践から、音楽を通じた人間関係の広がりの可能性について着目した。音楽を他者と共有することが、活動の発展や個と集団の関係を促進すると報告している。また、音楽を用いた子育て支援のプログラムに関する研究に着目すると、秋崎(2015)²⁾は0～3歳児を対象にその発達と親子で楽しむことのできるプログラムを明らかにしている。参加型、身体活動、コミュニケーションを図ることなどで構成することが重要であるとし、プログラムの10の構成要素^{注1)}を示した。また、渡辺ら(2017)³⁾は、イベント型としての子育て支援

において、家庭でも再現できる内容と専門家のもとで体験できる内容を組み合わせ検討した。参加者のアンケートの結果から、親子で関わる時間と家庭で楽しむアイデアを伝えることにつながったことを報告している。これらの研究からもわかるように、子育て支援としての音楽活動を中心とした取り組みは、場所や対象、実施時間、規模も様々であり、その実施形態や内容は多岐にわたるといえる。

筆者らの実践は、保育施設において通常の保育活動や保育の生活の中に音楽コンサートを設定したものである。特別なイベントとしてではなく、日常の流れにおいて子育て支援への意識を加え実践を進めてきた。具体的には、保育の終了時間に近い夕刻に設定し、集団としての子どものみならず、お迎えの保護者にも共有できる時間を確保した。こうした時間設定には、保護者が子どもと一緒に音楽を聴くことのできる時間を意図的に作ったものであり、日常生活の中で子どもと一緒に音楽を楽しむ時間やコンサートに行く時間の確保が叶わないことへの補いの意味も含めている。また、参加者は保育施設の利用者のみならず、地域の方々も含まれ幅広いものとなった。こうした活動を継続する中で、参加者に応じるためのプログラム検討上には筆者らの意識の変化があった。それらの過程やプログラム構成を整理し考察することは、今後の活動内容の検討に活かされるものになると期待できる。

そこで、本研究は、保育施設において実施した子育て支援を意識した音楽コンサートの内容の実際とプログラム構成について整理する。その変遷や筆者らの意識の変化もふまえ考察し、今後の活動におけるプログラム構成の意義を明らかにするものである。

研究方法

研究の方法

同一園で5年間実践した音楽コンサートの実施内容を、Ⅰ期 [初期]・Ⅱ期 [中期]・Ⅲ期 [後期]の3つの段階に区分する。音楽コンサートの実施内容、プログラム構成ならびにそれらの変遷について整理し、主に次のことに着目し検討する。それは、実施における子育て支援の意識とプログラムの作成方法、選曲、当日の演奏の方法、実施上の留意、コンサートにおける参加者へ向けた実践の際の意識である。それらの各年度の実施内容と変遷から、筆者らが子育て支援への意識のありようがどのように変化したかについて検討する。その変化がプログラム構成にどのように反映されたかについて、プログラムの変遷から考察し、プログラム構成の意義を明らかにするものである。参加者へ対する調査を実施するものでないが、本研究の内容について実施施設長には口頭で説明し了承を得ている。筆者らの実施年度や区分については、表1の通りである。

音楽コンサートの概要

実施期間

2013年～2019年の5年間のうち、計7回

表1 コンサートの実施年と各回のテーマ

	実施年度	実施年月	コンサートのテーマ
Ⅰ期 [初期]	2013年度	2013年8月	夏の調べコンサート
	2014年度	2014年10月	秋の調べコンサート
Ⅱ期 [中期]	2015年度	2016年1月	新春コンサート
	2016年度	2016年12月	クリスマスコンサート
Ⅲ期 [後期]	2017年度	2018年2月	春のコンサート
	2018年度	2019年2月	春のコンサート
	2019年度	2019年11月	秋のコンサート

コンサートの実践者

2名（筆者ら）

実施場所

保育施設内ホール

開催時刻

夕刻17：00～18：00のうち、おおむね40分間

参加者

保育時間中の園児（0歳児～5歳児）・保育者・お迎えの保護者・施設の関係保育者・地域の親子・地域の住民・卒園生（小学生）・保育者養成校の学生・地域の企業関係者

音楽コンサートの実際と変遷

実施の経緯と保育環境としての音楽

筆者らの音楽コンサートの実施への経緯は、開催保育施設の園長先生からの依頼によるものであった。そこには園児の音楽体験を豊かにしようとするものであり、楽器の生演奏を聴いてもらいたいや、コンサートホールといった環境ではなく、近い距離感で楽器の音色を感じてほしいとした生の演奏を子どもたちが聴く機会を作りたい、との園長先生の願いが込められているものであった。そこに共感した筆者らによって、子どもが楽しめるコンサートを目指したことが始まりであった。子どもたちの園生活における音楽とのかかわりを重要視しつつも、以下の多面的な視点のもとコンサートの開催に向けた検討と実践を繰り返してきた。

そのひとつに、保育環境の一部になることへの意識があげられる。音楽コンサートとしての環境作りや用いる音楽にも意識を向けた。音楽を扱うことは、当然にして日常保育の一部でありながらも、子どもにとってはコンサートとしての特別感にも映る。つまり、日常の保育の場面や環境と異なる雰囲気作りもその特別感を向上させることにもつながる。そこには、開催時間や会場の構成、そして視覚的な意識としての演奏者の衣装などがあげられる。また、人的環境として考えた場合、

筆者らの存在も少なからずは影響することになる。筆者らのうち1名は、実施園における園児に対し月に1度、定期的リトミック指導をおこなっている。こうした子どもたちとの関係性の中でコンサートを実施することは、知っている人やそのつながりのある人によっておこなわれるということも、ひとつ期待感につながることも考えられる。また、子どもとの音楽活動の一部が何かしらとコンサートの構成にも活かされるものとなり、連動性も生じるものとなる。これらは、音楽や楽器を扱う際の、筆者らの意識に大きく占めるものとなる。日常の保育における音楽活動の中で、子どもたちが触れることや耳にする楽器や音色は、ある一定の範囲内に留まっていることが通常ともいえる。事前の確認においては、主に以下のような内容であることを把握した。ひとつに、子どもの歌唱を目的とした際のピアノ伴奏としてのピアノの音色がある。また、楽器活動を目的とした際に使用する簡単な打楽器や、リズム表現において用いられる音楽や曲に触れる機会はある。保育の中で経験する音楽はこうした背景があることをふまえ、普段子どもが用いる楽器や聴きなじみのない音色も意識しておこなった。

これらは、子どもたちと同じ時間を共有する保育者の方々にも、様々な形で協力を得ることとなる。選曲においては、日ごろ子どもが楽しんでいる曲や、保育者好みの曲などもリクエスト曲として伺い反映する。コンサートの途中には、保育者が参加できる場面を設定し演奏に加わる曲も設ける。子どもたちにとっては、保育者の演奏を見ることの喜びや楽しさを感じるようになる。保育者にとっては、子どもが使う楽器の奏法や工夫をすることとなり、表現の広がりを実感することになる。

また、コンサートの開始前には曲目を事前に告知し、職員にも期待感を持ってもらうようにした。退勤時間後の職員も自由参加とすることや、全職員が参加の対象となり園全体の雰囲気作りにもつながっている。こうしたことから、保育における音楽活動が、教え込むことやできるようにすることではないことの再認識の機会となることへの期待もある。音楽を介し保育施設の関係者において楽しさを共有する経験から、子どもの表現の可能性につながる契機となることへの願いも含められるのである。

子育て支援としての意識

保育施設を拠点とした子育て支援の視点において、保護者に対しては次のことを意識した。それは、開催時間を保護者のお迎えが多い時間帯に設定し、日常の生活の中に支障をきたすことがないように心がけた。園児はコンサートの開始時から参加するが、保護者は必ずしも最初から参加できるとは限らないことから、プログラムの中盤から後半にかけ、保護者を意識した曲を用いるようにした。保護者の参加や時間は自由であり、座席は後方に設けている。

地域に向けては、地域に根差した保育施設としての役割を新設当時から意識され保育活動がおこなわれていた。そうした背景のもと、音楽コンサートの実施と地域とのつながりは次のように実施された。保育施設においてコンサートの告知がなされ、具体的には、プログラムの内容を載せたポスターを園の入口に掲示、ホームページでのコンサート開催の告知、ご近所にはチラシを配布するなどである。こうした経緯から、地域の方の参加も徐々に増え、園の利用者のみのコンサートから、

地域の子育て世帯や隣接する企業にも向けた内容へと転換するような経緯があった。

プログラム構成の工夫

参加する子どもに向けては、次のような工夫をしておこなった。開始の際は、(筆者ら演奏者の)登場と同時にオープニング曲の演奏を始める。ここには、普段聴く機会が少ない楽器から奏でる音色への新鮮な気持ちや音色の美しさを感じてほしいことが願いとしてあげられる。プログラムの曲数は、分数によってもことなるが、毎回約10曲から15曲ほど用いている。プログラムの順番については、受動的な活動と能動的な活動^{注2)}が交互になるプログラムを構成することを心掛けている。このことはプログラム全体のバランスを考えて構成するものであり、子どもが楽しんで参加することが維持できるように意識したものである。

曲の扱いについては、普段のリトミックで使用している曲は歌唱目的とした。リトミックで使用していない曲として、アニメやテレビの曲は、歌唱することもリズムを楽しむことも自由に参加できるようにして用いた。また、子どもが知らないであろう曲も取り入れた。それは、大切にしたい日本の曲として、唱歌や大正時代の童謡を演奏において伝えた。そのほかに音楽的には単純な構造を持つ曲を用い、楽器の音色を加えることで、さらに違う印象をもつことにつながることも意識した。また、今、子どもを取り巻く環境としての音楽には、動画中心でインパクトがある曲も普及し、多様な音楽のあり方や違いを知ることにについても意識した。

参加の方法については、先にも述べたが能動的活動と受動的活動とした視点をもって構成したことが反映されるものになる。それは、音楽療法の視点で次のように捉えてきた。単純に歌唱することや手拍子でリズムをとるなどの目に見えた動きのみを能動的と限定せずに、歌詞の印象や音楽の構成が心理的に感情の高揚が予測できる曲も能動的活動に含めた。受動的については、鑑賞することのみを受動的と捉えるのではなく、子どもが楽しんでいる姿そのものや、保育者の楽器演奏を見ているといったことも含めている。つまり、参加者の感情の穏やかさを保つことが予測できる曲を受動的活動とした。こうして、表面的な評価だけでなく、参加者にどのような作用をもたらすかといった楽曲の持つ特性を十分に意識した構成とした。

選曲の変遷

I期からの選曲においては次のことを意識してきた。季節の曲や、事前にリクエストのある曲を主に用いるようにした。筆者らのうち1名は、月に1度のリトミック指導で子どもたちと音楽活動の一部を共にする背景があることから、子どもたちが日常的に歌い楽しんでいる曲を把握していることも選曲に活かしてきた。その他、話題の曲や知っている曲、参加者や対象を意識した子どもから大人も楽しめる曲を用いた。

II期では主に、前半にリトミックで歌ったり、楽器演奏をおこなう子ども向けの曲、中盤から後半にかけては家庭で聴く機会がある曲、または季節の曲として使われている子どもが聞きなじみのある曲を意識した選曲とした。コンサートの終了時にはクールダウンをおこなった。

III期では、前半に子ども向けの曲、中盤から後半にかけて大人向けの曲、年代関係なく誰もが楽しめる曲を取り入れ、高揚感の後にクールダウンをおこなった。これは音楽療法で用いられる方法の

ひとつであり、参加者が徐々に高揚感を感じられた後にクールダウンするものである。その方法に基づきプログラム構成をした。実施曲一覧は、最後に添付した。

結果と考察

結果

I 期〔初期〕においては、前半に参加型とした主にリズムカルな曲が用いられた。後半には鑑賞が多く、終盤においては参加型で締めくくる内容であった。これは親子ともどもが、最後に音楽を楽しんで終わることを目的としてきた編成としたためであった。この期での実践において筆者らは、次のような課題をもっていた。それは、コンサート終了後にも延長保育で保育時間が長くなる子どもがいることや、仕事で疲労している保護者への配慮の必要性を感じたことにある。そうした状況の中、選曲や音楽の展開が高揚したままで終了しても良いのかという疑問が生じた。つまり、1日の生活時間を考えた際の、子どもの体力や保護者への配慮について課題とした時期であった。

II 期〔中期〕では、前半に子どもの参加型の音楽を用いていた。中盤から後半にかけては、大人向けの音楽を組み込んでいた。終盤には子どもも大人も共通で楽しめる曲を用い、最後はクールダウンで終わるように変化した。ここでは、I 期における疑問や課題を解決すべく、音楽療法の視点を取り入れたプログラム構成に再考したことによるものであった。プログラムの前半に子ども中心の楽曲とし、後半には保護者向け、かつ子どもにも聴きなじみのある楽曲を中心とした。コンサート終了に向けて高揚感のある曲を用いた後に、一気にクールダウンする方法をとったことで、締めくくりには充実感がもてる効果が得られたことにつながった。

III 期〔後期〕においては、前半に子どもが歌唱する曲を用い、後半は大人と共有できる選曲を用いていた。ここでの大人と共有できる選曲については、子どもが普段聴いている曲ではないが、曲想や雰囲気から筆者らによって判断したものであった。終盤は、II 期同様に高揚感から一気にクールダウンする方法を用い構成した。II・III 期においては、最後の一曲でクールダウンをおこなうこととなり、特に楽曲の持つ特性について慎重に選曲した経緯があったことが確認できた。演奏においても、テンポ、音量など繊細さを持って演奏することを心掛けたものとなった。このように、保護者がより多く参加できる後半の時間帯に高揚感のある曲を用い、最後はクールダウンできる曲を使用することによりカタルシス効果^{注3)}が得られるように構成したのであった。

I 期からIII 期全体を通しては、次のような共通の事項も見られた。それは、使用曲は実施時期の季節を強く意識したものであることであった。また、日本の唱歌や古くから歌い継がれる曲を盛り込んでいることであった。これらのことは、コンサート活動を通して参加者の全世代と歌い継いでいこうとする筆者らの思いが現れたものになるといえる。また、選曲はプログラム構成に意識して活かすほかに、進行の際に曲の解説も交えている。特に保護者や大人へ向けた曲の解説には、筆者や実践者からの応援や、時代を回想することの意味ももたせていた。

考察

総じて子育て支援を意識した音楽コンサートのプログラム構成には、次のことが重要であるといえる。一つ目に、参加者である対象やその状況に応じる姿勢のもとに、選曲することの重要性についてである。それは、子どものみならずその場所や時間を共有する参加者全体で音楽を楽しもうとする意識が、選曲や進行に活かされる必要であることが再認識できる。二つ目には、音楽コンサートの実施には、環境としての雰囲気や時間構成、プログラム構成が関連するということである。その場を共に過ごし共に参加し進行する雰囲気作りも相まってコンサートがなり立つものである。そこには、参加者や出演者の人的環境としての影響も相乗するといえる。しかしながら、これらは単純にパターン化させることとは異なる視点をもつことが重要であると考ええる。コンサートを通した参加者、対象、あるいは時間と場所を共有にする方々に、常に応じる姿勢をもって構成することであり、その時々状況や背景をもとに検討し吟味し続けることが今後のプログラム構成において必要不可欠であると考ええる。

おわりに

筆者らの音楽コンサートにおいては、保育施設を拠点とした子育て支援の視点は外せないものであった。それは保育所保育指針にも示されるよう、保護者の就労や生活形態が様々である中「保護者の状況に配慮して機会を提供する」⁴⁾ ことの一助となるべく模索してきた経緯があった。コンサートの終了後には、保育者と保護者がコンサートで聴いた曲を懐かしがることや、親子で曲について話をする様子があったことも報告された。また、メンバーの1人がリトミック指導で数日後に園児と再開した際に、子どもたちからも曲の感想や、ドレスのデザインや色への感想、用いた楽器の音色などについても詳細に覚えていて話をする場面も確認できた。

本研究では、筆者らの実践と変遷をふまえ、選曲に焦点をあてたプログラム構成の検討に留まった。今後は、それらの曲に用いた楽器やその扱いについても検討することが必要であろう。また、保育者や参加者への調査を通して、音楽コンサートを通した子育て支援の役割について検討することがこのこされた課題となる。

注 釈

注1) 秋崎 (2015) は、0～3才児にふさわしいプログラム内容の構成要素に次の10項目「手遊び・ふれあい遊び、リズム体操(ダンス)、生演奏を聴く、歌を歌う、楽器遊び、リズム運動(想像的表現活動)、オリジナル楽器をつくる・音楽に合わせて楽器を鳴らす、シアター(視覚的道具と歌)、絵描き歌(絵と歌)、サウンドストーリー(絵本と音楽)」を示した。詳細は引用文献2)の通りである。

注2) 音楽療法においては、音楽を鑑賞する活動を受動的音楽療法とし、歌唱や楽器演奏、手拍子など自ら音を出す活動を能動的音楽療法としている。筆者らのうち、武田は日本音楽療学会認定音楽療法士である。

注3) 音楽療法実践の一つで感情の浄化を表す。起源はアリストテレスの「カタルシス理論」に由来するとされ、音楽療法の実践では一般的に用いられている。

謝 辞

本研究にご協力賜りました保育施設の園長先生はじめ、関係者の皆様、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

本研究を進めるにあたり、NPO 法人日本音楽療法センター理事長の呉竹仁史先生にご助言を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

引用文献

- 1) 山原麻紀子・田尻さやか. (2020). 子育て支援活動における音楽の役割－個と集団のかかわりを育む機能と作用－. *ライフデザイン学研究*, **15**, 217-232.
- 2) 秋崎 剛. (2015). 音楽の活用を中心とした子育て支援プログラムの開発に関する研究－プログラム内容の構成要素に着目して－. *幼年児童教育研究*, **第27号**, 35-48.
- 3) 渡辺明子・野上遊夏・西 智子. (2017). 音楽表現遊びを中心としたイベント型子育て支援プログラムの意義. *生涯学習研究：聖徳大学生涯学習研究所紀要*, **15**, 21-30.
- 4) 厚生労働省. (2018). *保育所保育指針解説書*. フレーベル館, 334.

参考文献

- 呉竹英一・浅田庚子(編). (1999). *ドクタークレピーとプリンセスカノコの元気の出る音楽療法～音楽療法へのご招待～*. ドレミ楽譜出版社.
- 日野原重明・篠田知璋・松井紀和・青 拓美・岸本寿男・坂東 浩・岡崎香奈・米倉裕子. (2001). *新しい音楽療法：実践現場からの提言*. : 音楽之友社.
- 公益財団法人 児童育成協会(監修). (2019). *新・基本保育シリーズ⑨子育て支援* 西村重稀・青井夕貴(編). 中央法規.
- 村井靖児. (1992). *こころに効く音楽*. : 保健同人社.
- 貫 行子. (1996). *高齢者の音楽療法*. : 音楽之友社.
- 谷口高士. (2000). *音は心の中で音楽になる：音楽心理学への招待*. : 北大路書房.

資料 「音楽コンサートのプログラム一覧（2013年～2019年）」

区分	年度	曲名	区分	年度	曲名
I 期	2013	ルパン三世のテーマ' 7 8	III 期	2017	虹の彼方へ
		さんぽ			ジグザグおさんぽ
		手のひらを太陽に			手のひらを太陽に
		ドレミのうた			桜坂
		愛のあいさつ			春よ、来い
		ハイ・ホー			ルパン三世のテーマ' 7 8
		ビビディ・バビディ・ブー			365日の紙飛行機
		小さな世界			The Rose
		星に願いを		2018	虹の彼方へ
		ミッキー・マウス・マーチ			パレード
		ほたるこい			手のひらを太陽に
		浜辺の歌			ひこうき雲
		うみ			やさしさに包まれたなら
		Tsunami			春よ、来い
		見上げてごらん夜の星を			さんぽ
		にじ			夢をかなえてドラえもん
	2014	ムーン・リバー			ルパン三世のテーマ' 7 8
		さんぽ			見上げてごらん夜の星を
		風になる			情熱大陸
		ねこバス			ムーン・リバー
		君をのせて		2019	カントリーロード
		カントリーロード			ねこバス
		ねこバス			風になる
		ひこうき雲			The Rose
		赤とんぼ			パブリカ
		時代			夢をかなえてドラえもん
		パレード			ミッキー・マウス・マーチ
	2015	トップ・オブ・ザ・ワールド			ビビディ・バビディ・ブー
		やさしさに包まれたなら			星に願いを
		海見える街			里の秋
		ミッキー・マウス・マーチ			ちいさい秋見つけた
		チム・チム・チェリー			虫の声
		いつか王子様が			七つの子
		ビビディ・バビディ・ブー			赤とんぼ
		雪			情熱大陸
		情熱大陸			ロンドンデリーの歌
		ロンドンデリーの歌			
II 期	2016	星に願いを			
		ホワイトクリスマス			
		アメイジング・グレイス			
		そりすべり			
		ジングルベル			
		赤鼻のトナカイ			
		きよしこの夜			
		あわてんぼうのサンタクロース			
		冬景色			
		この道			
		ウィンター・ワンダーランド			
		糸			

